

# 同窓会会報

高知県立大学看護学部

第16号

平成30年3月30日発行

〒781-8515 高知市池2751-1



## ごあいさつ

## 同窓会会長 梶原和歌

寒波も去りやっと硬い桜の蕾が少しずつ膨らんでいく姿に心が弾む季節となりました。同窓生の皆さまお元気でしょうか。今年3月卒業、修了された皆様おめでとうございます。ご存知のように母校には昭和26年に発足した同窓会しらさぎ会があります。看護学部同窓会は平成21年に準備会が発足し22年7月に南裕子さんを初代会長に選出しスタートしました。目的は会員相互の親睦と交流、会員の社会的発展に資すること高知県立大学看護学部の発展に寄与することです。歴代先生方の努力と温かいご指導のもと、卒業生・修了生は高知女子大学看護学会を軸に毎年集い研鑽する機会を与えられ今年44回目を迎えます。その学会の前夜祭あるいは後夜祭として同窓会総会と懇親会を開催してまいりました。現在の会員は、大学卒業生1,878人、大学院(修士課程・看護学専攻・博士前期課程)修了生総数236名、大学院(博士後期課程)修了生51名、合計2,165名の堂々たる集団構成となっております。1学年20名だった10期生の私には驚くべき数字でいつの間にかこんなに立派な修士や博士が誕生したのだらうと目をみはっています。学内の先生方も公立大学法人理事長・学長として7年間勤められた南裕子先生を始め、現学長の野嶋佐由美先生、学長特別補佐、学生部長に森下安子先生、健康管理センター長の時長美希先生、教務部長に長戸和子先生、看護学研究科研究科長に藤田佐和先生、看護学部長に中野綾美先生、しらさぎ会会長山崎美恵子先生など会員が活躍中です。日本全国でご活躍の方々を挙げると母校の足跡が一望できると思いますがそれぞれの専門領域でネットワークを組んでおられることと思いますのでとりあげません。現職以外でご家族の介護をされている方や第二の豊かな人生を謳歌されている方も多くなりましたのでこの会報で順次ご紹介してゆきたいと考えています。野嶋学長は年々増加していく卒業生のために、看護学会は学術集会として学術的研鑽をはかり、看護の実践の向上と看護学の発展を目的とし、同窓会は卒業生相互の親睦と交流を担うというように役割を明確にする必要があるといわれています。予算の執行状況を見ていただくと明らかですが、女子大看護学会への支援活動費、学生及び同窓生の活動支援費、緊急奨学金費などにウエイトを置き、情報として、会報の発行を年2回行い、看護学部のニュースや卒業生、在学生などの活動を紹介しております。予算の執行面から年会費を戴いている若い会員に還元できる取り組みと母校看護学部の発展に有効な運営と組織体制にしなければならぬと考えています。昨年は野嶋学長就任お祝い会と総会が重なりましたので、十分な時間が取れませんでした。今後、備え皆様のご意見をお待ちしております。と、言いつつ、今年の総会も看護学会と抱き合わせで、7月14日(土)夕方、料亭濱長で開催する予定です。その後でクラス会をすとか、どうぞ同窓会として有意義な日にさせていただきたいと思っております。



- ① 同窓会会長ごあいさつ
- ② ようこそ先輩!
- ③ 10期生のつどい
- ④ 全国で活躍する卒業生・修了生
- ⑤ 同窓会による学生・卒業生活動支援
- ⑥ 入学して1年たって
- ⑦ 温故知新



# ようこそ先輩！

## 門田 美千代さん（2期生）

私は高知県立高知女子大学家政学部看護学科の2回生です。当時の大学は、大学教育とは言い難いお粗末なものでしたが、教官と学生の絆は強かったように思います。一時、廃校になりそうになった時、大学存続を叫び、学生教授陣が一丸となって、【女子大学を守る会】を結成し、県知事・婦人団体に働きかけ、「婦人団体も女性の地位向上」に立ちあがり、文部省にまで働きかけ、存続を勝ち取ったことが今は懐かしく思い出されます。

その後の大学は、大学改革や教授陣の刷新、また学生・卒業生が教育に研究に研鑽を重ね、努力して下さった結果目覚ましい躍進を遂げ、現在の県立大学看護学部の存在が全国的に輝くようになりました。また専門看護師や大学院博士課程まで有する、看護学会では一目置かれる存在となっております。

私は、女子大卒業後は、職に恵まれ高知大学教育学部付属小学校に12年在職し、その後主人の転勤で香川県に転居しました。一時主婦専業に専念しておりましたが、和井先生の紹介で、現在の瀬戸内短期大学に15年勤務しました。丁度瀬戸大橋が開通した翌年に吉備国際大学看護学科に高知から約10年通勤した事でした。世界一の瀬戸大橋を毎週通勤できることは、四季折々の素晴らしい景色に触れ、また瀬戸内海に落ちる夕日には感動し通勤することも一つの喜びでした。

その後は福山平成大学に4年間勤務し78歳で退職いたしました。現在は「学校法人平成学園夢工房ちより」の看護師をしておりますが、幼児教育に接して乳幼児教育の重要性を改めてひしひしと実感しております。

私生活としては、毎朝5時から6時まで家庭倫理高知の「朝起き倫理塾」に参加しております。朝の集いは、心身ともに爽やかに元気をもらいます。

お蔭様で85歳になりましたが、健康に留意しながら元気に楽しい日々を過ごしております。



## 中山 恭子さん（9期生）

衛生看護学科第九回生として卒業してから、五十五年が過ぎました。在学中在職中その後のことを振り返りますと、懸命ではありましたが拙い歩みでした。仕事と家庭の両立は叶わず、卒業後七年を勤めたのみで専業主婦として過ごしました。子育ての最中、乳癌を患ったとき「貴重な経験ですね」と言われた医師の言葉が忘れられません。曲がりなりにも二十九年間無事に過ごせたのは、病気の早期発見と周囲の方々の心遣いと支えのおかげです。

夫の退職後、高知で多くの活動に参加出来たことは、私にとってこの上なく有意義なことでした。両親を送った後のイエローナイフへの旅に始まり、姉とともに参加したロシア旅行、ポーランド・アウシュビッツとフィンランドの旅、「女性九条の会」の平和の旅の知覧・沖縄・広島・大久野島・震災後の東北支援と研修・登戸研究所他を訪ねた東京、神奈川などによって視野を広げ、多くを学ぶことが出来ました。今一つ大きかったのは、俳句と短歌に関わったことです。知人に誘われ句会に参加するようになり、続いて国見純生先生（故人）主宰の短歌結社に入会させていただきました。俳句はホトギス系の句会、短歌は斎藤茂吉や土屋文明を師系とする「海風」短歌会です。このことによって自然や社会や人の心を、十七文字、三十一文字という短い詩形に表現する楽しさを知り、また言霊と言われる日本語の魅力に触れることができました。

今の社会に思うことは、憲法を巡って日本の在り方が大きく変わろうとしている事です。国会での改憲発議が目前となる中、悲惨な戦争の記憶が蘇ります。その反省から生まれた日本国憲法を変え、軍事国日本をめざす動きに対して危惧する人は多いと思います。比類のない平和主義の憲法を守る為に、何らかの行動をすることの大切さを思います。



# ようこそ先輩！

## 山崎 智子さん(3期生)

新年度が間もなくはじまる今日この頃、人それぞれの立場によって、それぞれの思いがめぐりあっていることでしょう。

職を離れ二十余年、古株の私にとって、当時の初々しさは遙か彼方の思い出として浮かびます。願っても叶わぬこととは知りつつも、一瞬、その昔に戻ってみたいと思うことがあります。そんなこと・・・と瞬時に現実に引き戻されてしまいます。当たり前ですね。そんなことを繰り返しつつ、年を重ねているのです。夢か現実か判断がつかなくなった時点で、おさらばとなるといいのですが、思い通りにならないのが現実です。でも叶えてほしい願いです。



## 林 和美さん (5期生)

私は、昭和三十四年看護科を卒業しました。県立病院の看護婦を三十六年間して、義父が脳梗塞で倒れたため、一年早く退職しました。そして、自宅で看護をし、一年後義父が亡くなり、その後、地元の看護学校に非常勤で五年間勤務しました。県職員看護婦の最後は、県立中央病院(医療センターの前身)の総看護婦長を務めました。

早いものであれから二十三年、看護学校を退職してから十八年になりました。私の看護婦時代は、育児時間、育休もなく、手術室勤務の時代は、毎夜十二時帰宅が一週間も続き、子育てについて悩み、仕事を辞めようかと思いつつも、これ以上大変なことは無いだろうと思ったことが何度もありました。でも二人の子供は、何とか無事に育ってくれました。

主人が、女性も仕事が続けられるように、協力してくれたこともあり、何とか看護の仕事を全うできました。

現在は、月のうち半分は、茶道をならったり、教えたりしています。茶道の「和敬清寂」は奥が深く、この言葉の実践についていつも心がけています。幼稚園、小学校に教えにいきますが、ほとんどボランティアです。でも一部、伝統文化の継承ということで助成金を国からいただいております。茶道のおかげで高校生や現役で働いている人と接し、昔の同僚とも時には、医療の昔、今を話しながらお稽古をしています。教えることは習う事。私のポケ防止です。茶道は、母が九十五才まで教え、九十九才で亡くなったのですが、その母を見守るためでもあり、お稽古に週一回通ったのですが、本格的にお稽古をはじめたのは、県立病院の看護婦を退職してからです。季節の花を活け、軸をかけ、そこに書かれている禅の教えを受けています。

高齢者の集まりを主人と二十年くらい前から近くの河川敷にある公園を掃除し、体操などをしていましたが、最近はその市高齢者福祉事業の一環としての行事となり、助成金もいただいております。そんなことで組織的に、月三回は歌を歌い、体操、ゲームをし、隣人の健康を確かめ合っています。バス旅行にも行きます。昨年は花見の帰りに体調を崩し、気分が悪くなった人が出て、途中救急車を呼んで病院に搬送、事なきをえました。病人が出ると、私は突然体が動きだし、看護の仕事に目覚める自分がおかしくなります。

主人には国へ出す茶道の文書手続きのこともあって、組織の会長にもなってもらっています。が、主人が所属している歴史の会に私も準会員として入り、時に講演、フィールドワークなどに参加しています。これも楽しい事です。

夕方、暇をみつけて四十分ほど歩きます。最近、ハズキルーペのおかげで読書、パソコン、楽譜がとても見やすくなり、何様田舎の一軒家ですので、誰に気兼ねすることも無く、昔弾いていた曲、季節の曲を楽しく弾いています。今は「雪の降る町を」や「浜辺の歌」などを歌いながら弾いています。

今の所、頭も手足も不自由なく動き、有難いことです。今、週の内、四日くらい車の運転で出かけるのですが、これが免許返納となると、何もできなくなると思うと、悩んでしまいます。



# 10期生の集い 同窓会

## —2018年新年に寄せて—

### 10期生 山崎 加代子さん

卒後50年、半世紀を過ごし、古希を迎えた5年前、現同窓会長の梶原和歌さんが「一年後輩(前南裕子学長のクラス)は毎年同窓会を開いているらしい。私達も同期生の卒後の消息を知りたいね。」との発案で10期生の同窓会が始まりました。

最初の第1回は高知市、月の名所の桂浜で2013年9月開催となりました。

半世紀を経た、懐かしい旧友達の顔を見て、最初は戸惑いながらも、すぐ誰か分かり

打ち解け、旧姓を呼び合いながら、気持ちは、すっかり当時の学生時代に戻って若返り、酒を酌み交わしていました。澄みきった空に、美しく輝く、十六夜の月を観賞しながら、又新鮮な海の幸を味わいながら、50年振りの再開を喜び合いました。

その後毎年開催し、昨年には第5回を数えています。そして今年は、めでたく喜寿を迎えました。年を重ねて、喜ばしくもあり、過去を懐かしむ、後期高齢者となりました。

入学生は20人でしたが、住所の分からない方、20代で亡くなった方、他の大学を再受験された方等で、現在16名が会員名簿に記載されています。開催地と参加者は以下の通りです。約半数の出席です。第1回、高知市桂浜、第2回奈良公園、第3回神戸市北野異人館、第4回高知県黒潮本陣そして昨年度の第5回は岡山市でした。第4回以後開催地を高知、次の年は他県在住者地と交互に開催となり、高知と、同期生の住んでいる地での開催を繰り返しています。第6回今年の開催地は、高知でという事になっています。第4回以後、開催日も10月第4週水～木曜日になっています。



牧野植物園ハス(2013年9月)



桂浜十六夜の月(2013年9月)

それぞれの歩んで来た人生を心に、額に刻んでいて、38年間勤め挙げた人、未だ現職の人、子どもを立派に育て上げたあげくまたまた“孫やらい”にいそしむ人、病院通いの人、そして親や夫の介護で手が離せなく同窓会に出席できない人、まだまだ元気にモルジブでダイビングを楽しんでいる人、50数年の人生は重く、長く、いつまでも話は尽きませんでした。

特筆すべきは昨年、奇しくも、菊井和子先生(3期生)にお会い出来、先生の川崎医療福祉大学創設にかかわった苦労話、そこでの基礎教育科目のテキストとして編纂された「生と死」の貴重な本をいただきました。生命倫理学、哲学、看護学から捉えた三人の共著で菊井先生は看護学の立場から書かれています。先生の米留学経験から、最先端で奥の深い「生と死」の在り方が記されていて感銘を受けました。

今年の高知での再会を待ち望んでいる所です。



菊井先生を囲んで(2017年10月)

# 全国で活躍する卒業生・修了生

公益社団法人日本看護協会 神戸研修センター 神戸研修センター長・教育研修部長(併任)

足利 幸乃さん(25期生)

思いがけず、この原稿の時期と認定看護師を対象とした研修でキャリアについて講義準備をする時期が重なり、キャリアとは何かと考えながら、高知女子大学家政学部衛生看護学科(以下、高知女子大)で受けた教育(1975年～1979年)と高知女子大のネットワークがいかにか私のキャリアに影響を与えたかを再認識しております。

私の現職は、公益社団法人日本看護協会 神戸研修センター長/教育研修部長(併任)

です。2000年4月にがん化学療法看護認定看護師の専任教員として入職し、今年で19年目となります。この入職のきっかけとなったのは、当時、日本看護協会です仕事をしてきた同級生の久保田加代子さんの存在でした。その前の職場は、南裕子先生を学長として公立では初めて看護の単科大学として開学した兵庫県立看護大学でした。高知女子大の先輩、後輩の密度が高かった職場で、当時の上司は先輩の野並葉子先生(現:神戸女子大学 看護学部長)、助手には後輩の豊田邦江さん(がん看護専門看護師としてご活躍中)がいました。

高知女子大時代、実習指導でお世話になった先輩の近澤範子先生(現:兵庫県立大学 名誉教授)から教員募集のお知らせをいただいた頃、私は、カリフォルニア大学サンフランシスコ校がん看護修士課程(CNSコース)修了後、カリフォルニア州のとある病院でケモナース(ケモセラピー、がん化学療法領域のナース)として働いていました。

留学のきっかけも高知女子大でした。20代後半、看護師としてこの先どうしようと悩んでいた時に、野嶋佐由美先生(現:高知県立大学 学長)が相談にのってくださり、留学へのアドバイスやご支援をいただいたのです。その頃、高知女子大を訪れていたパトリシア・アンダーウッド先生にお会いしたことで留学の意志が固まりました。右も左もよくわからない中で留学し、大地震がサンフランシスコベイエリアを直撃した1989年に修士課程を修了、当時の日本では望めなかったケモナースの実務経験を米国で積んでいたのです。

兵庫県立看護大学時代、社会学や心理学、いわゆる看護でない先生方とのお酒の席で、「君はいい教育を受けてきているね。」と言われたことがあります。このいい教育とは、私が高知女子大でうけた女子の社会的自立を目指すリベラルで実学的な教育のことです。高知女子大の教育とネットワークが私を米国留学に導き、ケモナースの道に足を踏み入れさせ、今に至るキャリアの礎になりました。高知女子大が私にあたえてくれたものに感謝しつつ、終盤のキャリアを歩んでまいります。



向井 博幸さん(修士13期生) 小児看護CNSコース

私は平成24年に小児看護専門看護師を取得し、5年目の節目の年を迎えました。現在、県内で唯一の小児看護専門看護師として地域の総合病院に勤務しています。

私が患儿や家族と日頃関わりながら考えること。それは患儿が日常の中で何気ない時間に病気や自分と向き合い、家族とも話のできる機会を持てること。また、家族が日常の役割を担いながらもお互いのことを考え、家族としての力を高められるように支援することが大切だと考えています。また、入院前からの外来病棟間との連携、教諭、医療スタッフ等との連携を図っていけることは、患儿のスムーズな生活移行には欠かせないことだと感じています。そして、最近、私が大切だと感じること。それは、患儿、家族の日頃できていることを褒めることです。自己を心地よく認識でき、辛いだけの治療ではなく、頑張り認め、モチベーションを上げることにも繋がると考えます。またそれは、個々のスタッフの私には真似できない行為に対しても同様のことだと感じています。

プライベートでは手ごわい息子と、また、まだまだ十分とは言えませんが、患儿や家族について一緒に考えながら自問自答し、日々格闘しながら頑張っています。



宗石 こずゑさん(修士15期生) 地域保健学領域

後輩を育成する立場となり、自分自身がどうあるべきか、今一度考えてみたいと思い、大学院の門をくぐってから5年が経とうとしています。研究でプロフェッションフードという概念に出会い、自分がどのような覚悟で保健師として公衆衛生看護に向き合っているのか、研究を通して自分を振り返ることができました。

市町村の現場では今、南海トラフ大地震への備えが急ピッチで進められています。災害時の医療体制をどう確保するのか、人工透析や人工呼吸器を使用している重点継続要医療者の方々をどのように医療につなげていけるのか等、課題が山積です。災害医療担当として、私の勤務する香美市でも昨年、合併後初めてとなる災害救護訓練を実施しました。医師会、歯科医師会、薬剤師会、看護協会、警察、消防や地域のボランティアなどの協力のもと、市災害対策本部、医療救護所、避難所の設置運営と県医療支部との情報伝達を含む訓練となりました。この訓練により、様々な課題が明らかになり、今後取り組まなければならないことを整理できたこと、また関係機関とのネットワークができたことは大きな収穫でした。まだまだ取り組みを続けていかなければなりません、しくみを作り、後輩を含め仲間と実践の場で活動する中で、ともに学んでいくことが大切だと痛感する毎日です。



# 全国で活躍する卒業生・修了生

## 「看護師として働いて」

関西労災病院 三谷 建夫さん(63期生)

私は今、兵庫県にある関西労災病院で働いています。入職後配属された病棟は心不全や心筋梗塞、不整脈の患者さんが多く入院されている循環器の病棟です。入りたての頃はわからないことばかりな上に急性期の忙しさについていけず辛い日もありました。循環器の病棟ということもあり、モニターの音が鳴り響いており家に帰ってもナースコールやモニターの音が頭から離れずなかなか眠りにつけない日もありました。しかし今は少しずつではありますが、仕事にも慣れてきて患者さんと接する中で自然と

笑える余裕ができました。今の自分があるのは先輩方の温かいフォローや厳しくも愛のある指導のお陰だと思えます。働いて間も無く一年になろうとしています。毎日失敗ばかりで先輩にも呆れられていますが、今後も自分らしく患者さんのために頑張っ



## 「助産師として働いて」

JA 高知病院 戸梶 志桜里さん(63期生)

助産師として働き始めて、もうすぐ1年が経とうとしています。入職当初は、「今日はお産があるだろうか。」と、学生時代の実習中のように、毎朝ときどきながら出勤していました。1年働き、ようやく業務や環境には慣れてきましたが、対象者さんが安全な周産期を送られるようにと、緊張感のある日々を過ごしています。

1月の時点で直接介助者として正常分娩32例、帝王切開11例経験し、43人の新しい命の誕生に携わらせていただきました。多くのご家族と関わる中で、新しい家族の誕生を共に喜ぶことができる助産師という仕事に、改めてやりがいを感じています。働き始めて、出産を終えたお母さんの中には、自宅に帰ってから育児に困難を感じる方が多くいることを実感しました。JA高知病院では産後2週間健診を始め、より一層継続した看護の提供に尽力しています。私自身、今は目の前にいる対象への看護に日々悩み、先輩方から助言を頂きながら看護の質の向上に努めています。今後は、私も活動の場を地域へと広げ、女性とともにあり、女性を支援できる助産師を目指し成長していきたいと思っています。



## 「保健師として働いて」

幡多福祉保健所 友永 咲季さん(63期生)



保健師になり、1年が過ぎようとしています。「保健師さんだからこんなことも知っちゃう？」と聞かれるたびにどきっとしながらも、保健師として認められていることに嬉しさを感じているところです。

しかし、まだまだ未熟だと感じることも多く、自分がいる場所よりもずっと先に“保健師”という名前が歩いているんじゃないか、“保健師”に自分自身が追いついていないな～と感じることもあります。早く“保健師”に追いつけるように様々なことを経験していきたいです。学生時代を振り返ると、“健援隊”の活動により、特に9名の同期生との学びを通して、保健師を目指すきっかけとなる印象深い出来事を経験することができました。このときに得た感動や地域の魅力は心に残り、今も励みになっています。

一人一人に、また各市町村に、しっかりと向き合い、居心地が良いと思ってもらえるような地域づくりを目指してこれからも努力していきたいです。

## 「養護教諭として働いて」

四万十市立藤岡小学校 山岡 春菜さん(63期生)



養護教諭として働き始めて、早いもので1年が経とうとしています。昨年2月に国家試験を受けたことを懐かしく思います。

3月に配属先が決まった時には、慣れない土地での生活や一人職ということで、不安でいっぱいでした。しかし、子どもたちと会うと、子どもたちの笑顔に元気をもらい、この職に就いてよかったなと思っています。

学校現場では、肥満傾向児童や生活習慣の確立に課題のある児童、特性をもった児童など様々な児童がいます。養護教諭として、また、チームとしてどのように支援していくのか迷う場面がたくさんあります。そのようなときには大学時代に学んだことを振り返ることもあり、現在の自分の基礎になっているんだろうと思います。

まだまだ救急処置や保健指導では力不足を感じる毎日ですが、子どもたちの成長を楽しみに働いていきたいです。

# 同窓会による学生・卒業生活動支援

同窓会では、卒業生の相互交流や学生の様々な活動を支援することを目的に活動しています。  
平成29年度は、在学生の国際交流活動を支援しました。

平成29年10月23日(月曜)～27日(金曜)に、本学看護学部と協定を結んでいるインドネシア国立ガジャマダ大学医学部看護学科の教員3名、学部生5名を、短期研修として受け入れました。

今回いらっしゃったガジャマダ大学の先生方は地域看護学、老人看護学、精神看護学および災害看護学を専門とされており、高知県の地域看護や災害看護の対策について学ぶことを目的とされていました。

23日には学長、学部長、研究科長への表敬訪問と歓談後、キャンパスツアーで看護学部棟・看護福祉棟・共用棟を紹介しました。

24日は、午前中に高知県医療政策部の清水先生から高知県の医療保健政策・災害対策について講義を受けました。

午後はいの町にある紙の博物館で紙すき体験をしたり、五台山に登って高知市の地形をみながら津波の進路や災害の可能性について説明しました。

夕方は国際交流課とさくら寮有志で歓迎会を主催しました。

ガジャマダ大学の学生さんにはインドネシアでの学生生活の紹介だけでなく、民族衣装をつけてインドネシアの歌や踊りを披露してもらいました。交際交流課の柏木課長の先導によってみんなでよさこい鳴子踊りも踊って楽しく過ごしました。



～インドネシア国立ガジャマダ大学医学部看護学科の教員・学生と～



～紙すき体験の様子:いの町紙の博物館にて～



～歓迎会でのよさこい鳴子踊りの様子～



～歓迎会での記念写真～



25日は、午前中に高知県民文化ホールで開催されたいいき百歳体操大交流会を見学し、90代や100歳を越えた人が参加できる体操があること、住民が自主的にグループで体操を実施していること、市町村保健師が運営サポートやモニタリングをしていること、体操が大きな広まりを見せていることに驚きながら（椅子にすわったままですが）、一緒に体操を実施しました。



～いきいき百歳体操交流会に参加～



～いきいき百歳体操の様子～

午後からは保健福祉センターに3歳児健診の様子を見学に行き、健診でのチェック項目が多彩であること、医師・歯科医師・保健師・栄養師といった専門職が関わっていること、異常の早期発見を目的にするのではなく母親のサポートとエンパワメントを重視して関わっていることを学びました。その後高知市保健所の堀川先生から保健所の役割について、またいきいき百歳体操の発展プロセスについて講義をしていただきました。



～3歳児健診の見学～



～堀川先生からの保健所の役割についての講義の様子～

26日は午前中に国際交流セミナーを開催し、県立大学教員とガ ज्याマダ大学教員がそれぞれ自身の教育・研究についてプレゼンテーションし、討議を行いました。午後からは高知医療センターを見学しました。医療センターでは、災害時への対応の準備や高知DMAT(災害医療派遣チーム)についてもお話を伺いました。



～高知医療センター施設見学～



～ドクターヘリを見学～

27日は、ガ ज्याマダ大学看護学科と高知県立大学看護学部との交流や共同研究の促進について教員間で討議し、これから教育や研究分野での相互交流を発展させていくことを確認しました。その後、フィールドワークとして桂浜と高知城の散策をした後、インドネシアに帰られました。

ガ ज्याマダ大学の方々からは、今回の研修が本当に充実して学びの多い、そして楽しいものであったと褒めていただきました。同窓会からの活動支援のおかげで、ガ ज्याマダ大学の方に充実したプログラムを提供することができました。心より感謝申し上げます。





## ～入学して1年たって～

ユディ・アリエスタ・チャンドラ(DNGL共同災害看護学専攻)  
Yudi Ariesta Chandra:1<sup>st</sup> year student  
Cooperative Doctoral Program for Disaster Nursing



It was not realized that I had spent a year study in University of Kochi as foreign students. It seemed like yesterday I arrived in Kochi. Many experiences I got through this one year, valuable and memorable moments also I have. So herewith I will share two most memorable things of mine as foreign students in University of Kochi.

**People are working in full determination** DNGLや修士の仲間、先生方やスタッフの方のサポートのおかげで、留学生としての1年はあっという間に過ぎました。

Since first time I came to Kochi, I did not face any significant trouble in study process or daily life. During adjustment period, the university facilitated me very well to make me have a good adaptation to the environment and daily life. All lecturers and office staffs always shows a friendly attitude, although I am sure how busy they are. I assume that it because they work with full determination; always want to give their best. Besides that, due to barrier of language, my classmates both in DNGL and Master program are always patient to support me during the study. I was always so impressed if remember how hard they were try to explain some information to me in order to make me understand about it. Not only discussing the lesson, we also shared culture differences and it made me gradually get used to the life process here.

**Participating in international conferences**

世界防災フォーラム(於仙台)とEAFONS:東アジア看護学研究フォーラム(於ソウル)のような国際会議に参加できるとは思ってもいませんでした。さまざまな国々の研究者とネットワークを築くことができました。



I had never thought before that I would join two international conferences during my first year of study. Previously, I had guessed that the university would provide me support for conference on third or fourth year of study after I finish some research activities or studies. How a surprised and happy I was when I got email from DNGL office and announced me that I got two "tickets" for following any national or international conference anywhere I like.

Participating in international conference is always exciting for me because on that moment I have big chance to expand my network to make international collaboration work in the future, where development of my career path as global disaster nursing leader has begun since I entered DNGL program. Especially on the moment when I want to introduce myself to the leading person or someone I consider very important to build relation for future collaboration activity, usually it is very challenging because obviously so many attendants, not only me, also want to get acquainted with the person. So, I always challenge myself how I can introduce myself, describe my professional experience and research interest, and ensure the person that keep in touch with me also important to him/her at less than three minutes. I define that moment as "a valuable three minutes", and I think that how I maximize the *valuable three minutes* will determine my career path in the future. Maybe it is quite funny, but it motivates myself.

During this year I had joined World Bosai Forum (WBF) in Miyagi and East Asian Forum of Nursing Science (EAFONS) in Seoul, Korea. Through those two international conferences, besides presenting my studies and learning on the presented topics, as I expected I could get acquainted with many scholars, both nursing and non-nursing, that related to my interest from various countries, such as Japan, USA, China, Germany, Italia, Taiwan, India, Iran, Malay, Turkey, Australia, and so on, and come from various institution background such as UNISDR, WHO, UNDP, universities, NPO, or research institutes.

As the finest closing of the first year study, from these conferences I got an opportunity since this year to expand my collaboration network with one of famous research institute in Japan, IRIDes Tohoku University, when professor on that institute, who I have known since WBF in Miyagi, invited me to attend the research workshop meeting to that university on this March 2018. Although I remember that in University of Kochi and DNGL Program I am engaging with many superb professors and scholars, but getting invitation for seeking collaboration opportunity from other institution still make me excited. Hopefully, it could be the entrance for bigger international collaboration network that can support me as global disaster nurse to actively contribute in enhancing disaster health-risk reduction and developing disaster nursing in my country in the future.



スシラ・パウデル(DNGL共同災害看護学専攻)  
Sushila Paudel:1<sup>st</sup> year student  
Cooperative Doctoral Program for Disaster Nursing

はじめはネパールとは授業や課題のやり方が違うので戸惑いましたが、だんだん慣れることができました。5大学の努力によって、災害看護のグローバルリーダーの育成プログラムが成り立っていること、その一員になれたことを誇りに感じています。



### Experienced and Learned

Coming from the small Himalayan country, everything was so new to my college experience in the beginning. The standards of academic practice are very different from those of the academic system in Nepal and hence, it took some time to get used to. But University of Kochi has always welcomed and has properly guided through well-organized orientation days, official procedures, language classes, informative sessions, and advanced DNGL courses. In regards to DNGL program, the incredible efforts made by University of Kochi and other four universities, to create global leaders in disaster nursing to face global health challenges is immensely admirable and honorable.



I particularly admire the methods of teaching, supervision system & academic support. Sometimes there are language barriers, but teachers have always made their great efforts to offer classes in English. Plus I am also trying my level best to improve Japanese language ability. The atmosphere of the classes also makes me feel comfortable with stating my opinion or asking questions. In this one year, I learned all the basic concepts regarding natural and manmade disasters, national and international strategies for disaster management, national and international disaster organizations, disaster frameworks, disaster nursing activities, leadership and management, nursing theories, nursing research methods, and so on.

Particularly I got interested in environmental disaster study which was completely a new topic in my nursing career. The lectures were engaging, the tutorials were useful and the assignments were challenging. With every lecture, I used to discover something new and interesting. Further, the opportunities to get involved in different seminars, conferences, simulations and volunteering activities, fostered my advanced learning and skills. Overall I understood that every discipline has responsibility to meet the targets of Sendai Framework for Disaster Risk Reduction, and that requires coordination and collaborations across disciplines.

**美しく、のどかで自然が豊かな高知をとっても好きになりました。やさしくて思いやりのある地域の人びとから色々な文化を教えてもらいました。**

I truly believe I am blessed to be in a remarkably beautiful city Kochi. It has no crowded cities, and has fascinating and spell bounding nature, peaceful, clean and welcoming environment to all. There is naturally a vast difference in culture from where I come from but it has been an easy and exciting adaptation. I instantly fell in love with the atmosphere. I particularly love talking with local people and I am completely shocked by the love, respect and kindness that people give to me ingrained in the Japanese culture.

I attended annual “Mochi tsuki” events in 3 different places. I was amazed by the strength of the Japanese men who pounded the rice cake. It seemed easy at first but when I tried it, it wasn't that easy. I enjoyed a lot with community people and families. We do not have mochi in Nepal. So I found it too delicious. I also experienced making Kadomatsu.

Similarly I felt so great to celebrate New Year in Japanese style. I visited shrines, performed rituals and ate delicious Japanese foods. In Nepal, New Year is celebrated in April as per Nepali calendar. Overall, activities like gardening chilies, volunteering at Iryou center, family visits, presenting about Nepal in some events, attending language languages, participation in socio-cultural events, trips, get-togethers, etc. have made my socializing a more pleasurable experience.



**Surprised** ネパールでは学ぶことのできない災害看護を日本や中国、インドネシアの同級生たちと共に学び、研究への関心も高められ、自分自身も成長できました。日本は私の第二の故郷で、高知県立大学は私の家族です。

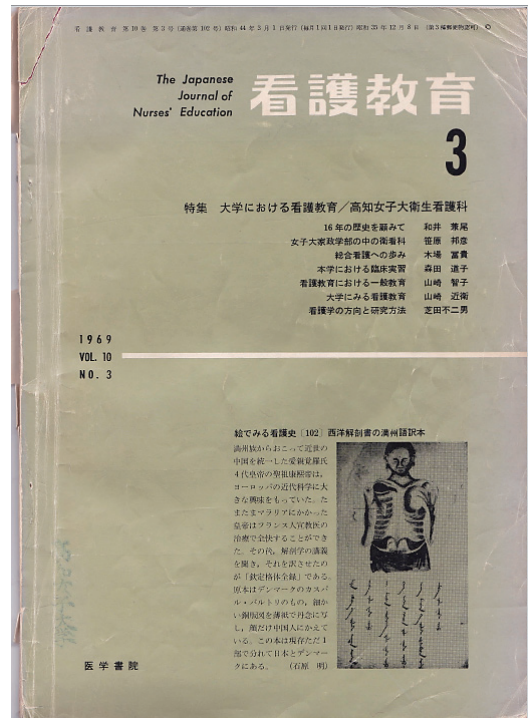
To study in a foreign country is not always easy. But in my case, I have always been guided by all, and I have got solutions all around. I miss my family, friends and support networks of my country but I have got abundant love and support from all teachers, friends, staff and university as a whole. Co-students have been extremely warm and friendly. Sometimes when I feel like I cant do this/that or at times when I am feeling down, teachers counsel me, motivate to face challenges, help me enhance my networking skills, identify my strengths & help me meet my goals & aspirations.

The atmosphere of the university is awe-inspiring.

If I compare myself from my initial days to date today, I have learned to accept challenges and some failures have helped me to develop more confidence within. Also, my perspectives to see the world has widened and I have been able to pass my knowledge to nurses in Nepal. By enrolling in University of Kochi, I have got chance to study major disaster nursing subject that wouldn't have been possible in my home country. I have got a great way to experience and understand national and international people, their traditions, and culture. I have got more opportunities to embrace my academic interests, in having personal growth, intercultural development and enhancing quality of education. I must admit my experience here has been very enriching and friendly so far. So I would love to say, Japan is my second home country and University Kochi is my family. I love my home and I love my family.



# 温故知新 その8



今回は、昭和44年(1969年)に医学書院から発行された“看護教育第10巻3号”を紹介します。

『特集 大学における看護教育／高知女子大学衛生看護科』として、1冊88ページのうち73ページにわたって特集記事が組まれています。

導入は8ページのカメラ・ルポで校舎や教室の授業風景、実習病院と実習の写真有り、1ページ目には永国寺玄関(2016年まで)の外観写真とともに次のように高知女子大学家政学部衛生看護科を紹介されています。「唯一の女子大衛看---わが国唯一の女子大家政学部における衛生看護科である。同学部内には、このほか家政学科、食物栄養学科、生活理学科など四科で構成されており、四国是最南端の高知には過ぎたるものの声もある。昭和24年に開学し、以後、27年に衛生看護科を増設して今日まで16年の間に二百有余名の、“学生”ナースが巣立っている。1学年定員20名で、大学教育による看護教育が行われている」

写真ページのすぐ後は『本学における看護教育－高知女子大卒業生大いに語る』で、司会の和井兼尾先生を含め16名での座談会で、学校保健・公衆衛生・臨床・看護教育・看護学の混乱・女子大に対する評価と反省といったテーマについてそれぞれの方が意見を述べられています。(一部を少しずつ抜粋・敬称略)

「女子大の特徴は、患者を人間として把握できる能力を養うところにあると思うのです(山崎美)」

「私は先ほど出ましたような看護大学(日赤・聖路加)が職業として看護教育を行っているのに疑問を感じます。女子大のほうは看護学を学ぶことを目標としていますが、これはとてもよいことであると思います(森田)」

「今までは、赤本の看護学講座、これしか看護学はないみたいに習ってきたが、そうではないことがはっきりしてきた。単なる技術の内科看護法を看護学と称してきたけれども、大学やその他の学校で扱うべき看護学というもの、実習や現場でとりあげる技術というものの区別はまだ明確ではない。(芝田)」

「学問としての体系化と同時に大学における看護教育の位置づけということも大きな課題ですね(和井)」

「ほんとうに学問をやりたいということになると、やはり大学院までなければダメでしょうね。我々としては、女子大にせめてマスターコースを置きたい。マスターコースを出た者は、看護を専門的に研究する人になってもらいたいというわけです(芝田)」

4年制大学での学問としての看護学と看護教育のあり方について、確固たる信念をお持ちでいらっしゃる先生・先輩と、大学すら少ない昭和40年代から大学院の必要性を主張されている先見性に改めて尊敬の念を抱かずにはいられません。

教科書やその他の古い看護の文献、あるいは看護の雑誌等をお持ちの方で、寄贈してもいいとおっしゃる方がいらっしゃったら、是非下記までご連絡・ご送付【連絡後、送料受け取り人払い】下さいますようお願い申し上げます。

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部同窓会 088-847-8718 (担当:川上理子)

## ご寄付をいただいた方

岡本 英様(13期) 岡崎 美紀子様(3期)  
 佐々木 正子様(5期) 山田 薫様(26期)  
 福岡 恵美子様(5期) 高木 和子様(13期)  
 25期生同窓会の皆様 鶴濱 祥子様(26期)  
 匿名希望2名

左記の皆様より寄付をいただきました。誠にありがとうございました。  
 (敬称略 平成30年3月23日現在)

### 平成29年度 高知県立大学大学院 看護学研究科 博士前期課程の院生の修士論文発表会



平成30年3月4日、看護学研究科博士前期課程の院生の修士論文発表会が開催されました。それぞれの専門領域において看護研究で探求してきた成果を発表されました。



### 平成29年度 高知県立大学看護学部 学生の看護研究発表会



平成30年3月5、6日には看護学部4回生の看護研究発表会が開催されました。



## 寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。  
 寄付金は、同封の振込用紙にてお願いします。ホームページでもご覧いただけます。  
 ご不明な点はいつでもお問い合わせください。

(池添・川本・西内)

同窓会会報は、同窓生の皆さまのご支援・ご協力のお陰で第16号の発行となりました。本号では、同窓会の活動支援の他、10期生同窓生のつとめ、卒業生・修了生の活躍、在学生の活動といった高知県立大学の幅広い年代の同窓生の情報を掲載しております。今後も幅広い同窓生の様々な活動の様子を発信していきたいと思えます。表紙の写真は、満開の桜の下、そびえる高知城です。懐かしいと感じる同窓生もいらっしゃるのではないのでしょうか。同窓会を開催したなど、情報があれば、ぜひお寄せ下さい。

編集後記

### 事務局

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部  
 Fax: 088-847-8750

### ホームページアドレス

高知県立大学  
<http://www.u-kochi.ac.jp/>  
 高知県立大学看護学部  
<http://www.u-kochi.ac.jp/~kango/>